

## - 2 大場磐雄博士資料の目録作成

大場磐雄博士資料は、博士が自ら調査・蒐集した資料と、寄贈を受けた資料の双方が含まれており、紙焼き写真・実測図・拓本のほか、報告書等の書類・地図・カード・新聞等の切り抜き・絵葉書・書簡などからなる。保管ケースにはその内容毎に名称が付されており、各ケース内には更に内容物を細分した分類袋が納められている。整理にあたっては従前の箱番号・名称等を尊重し、目録の目次はこれに従った。全体で約150箱存在しており、これまでに . 旧石器時代編1箱・ . 縄文時代編18箱・ . 弥生時代編13箱・ . 古墳時代編32箱の整理が完了している。その実態は、本書を通観することによって御理解頂けるものと思う。

また、 . 歴史時代編についても、全56箱のうち前半26箱までの目録は平成15年度の年次報告として公開した<sup>(1)</sup>。今や、整理作業も祭祀編・外国編などを残すのみである。その全貌については、全資料を整理した暁に、改めて紹介することにしたい。

これらの資料は整理が済み次第、順次電子情報としても公開している。以下、各編の概要について略記するが、目録の詳細は学術フロンティアホームページ<sup>(2)</sup>、並びに旧石器時代編から古墳時代編までは『大場磐雄博士資料目録』を参照されたい<sup>(3)</sup>。

(深澤太郎)

### 1. 旧石器時代編の概要

旧石器時代編は、大場資料の中で最も資料数が少なく、1箱6袋に過ぎない。もっとも、大場博士の研究対象を鑑みれば当然の数量であろうか。

全体的に見れば、長野県下の資料が比較的纏まった形で収められている。唯一、日付が明記されている資料も、長野県和田村男女倉遺跡と池ノ平白樺湖畔遺跡( - 3)の写真である。略年譜を参照すると、これは三笠宮崇仁親王殿下の随行として、昭和32(1957)年6月26日から28日にかけて尖石遺跡・諏訪大社・桜ヶ丘古墳・平出考古館などを歴訪した際に撮影されたものであることがわかる<sup>(4)</sup>。

また、「 - 4 武蔵野のポイント」は、全て宮崎純氏から寄贈されたものであり、他にも直良信夫氏から贈られた石器の写真などがあるように、本編に属する資料は贈呈を受けたものが多く含まれている。

なお、「 - 1 石器」に収める拓本の両面調整尖頭器は、同種の石器の中では極めて大型の部類に属するものである。出土地は記されておらず、石材にもよるが、恐らくは北海道から出土したしたものと考えられる。

一覧表中の種別は、**遺跡・石器・その他**の3種に細別することとした。

(深澤太郎)

### 2. 縄文時代編の概要

縄文時代編は保管ケース18箱分が存在し、遺物の種別毎に分類された箱( - 1 - 4)と、遺跡・遺構によって分類された箱( - 5・6)、地域毎に分類された箱( - 9 - 14・17)、時期毎に分類された箱( - 15・16)そして雑( - 7)の5種がある。

大場博士は、昭和初期まで縄文時代を中心的に研究してきたが、その後は神道考古学の分野に比重を重くしていった。しかし、遺跡の調査や『北安曇郡誌』・『下伊那郡誌』、そして『信濃史料』などの編纂に中心的な立場として携わった関係から、縄文時代の資料と縁が切れることはなかったのである。

大場磐雄博士資料の興味深いところは、純粋な学術資料とともに、今や失われてしまった景観を写した風景写真、人物写真、或いは古い絵葉書なども含まれている点にある。本編には、発掘調査時の写真や実測図・拓本などに加え、珍しいものでは採集資料を前にした大場少年のポートレートが見られる（ - 12 - 10）。恐らく、中学生時代に撮影したものであろう。当時の博士は、毎月収集した遺物を自宅で開陳し、考古会と称する展覧会を開いていたという<sup>(5)</sup>。約30年後に千葉県粟島台遺跡（ - 12 - 12）で撮影された50代の大場博士と比べてみるのも面白い。また、東京帝室博物館に勤務していた神林淳雄氏から送られた絵葉書（ - 2 - 9）などは、学史資料としても貴重なものである。

このように、年月日や地名が記された資料は、年譜と照合することによって、時間的・空間的な位置づけを行なうことが容易であり、博士が資料を収集した意図や、寄贈された経緯についても推察することができる。

なお、一覧表中の種別は縄文時代には属さない資料も含んでいるため、**遺跡・遺構・貝塚・土器・土偶・土製品（土版・土面を含む）・石器・石偶・石棒・石剣・石冠・石製品（岩版を含む）・木製品（独木舟を含む）・貝製品（貝輪・貝器・貝を含む）・装身具（玉類・耳飾など）・骨角器・獣骨・人骨・植物遺存体・その他（書簡・メモ・文書・地図など）のほか、寺院・窯・青銅器・鏡・埴輪・馬具・瓦・経筒の28種を設けた。**

（山添奈苗）

### 3. 弥生時代編の概要

弥生時代編は13箱からなり、遺構や遺物の種別毎に分類された箱（ - 1・3・8・10～13）と、地域毎に分類された箱（ - 5～7）そして特定の事項によって分類された箱（ - 2・4・9）に大別できる。「 - 2 弥生文化（農耕・生産・宗教関係）」には日本のみならず、英国やサイパン島などの資料も含まれており、また、アイヌの民俗資料や神社関連の資料も見られ、幅広い地域の資料を収集している点が特徴的である。

大場博士の弥生時代研究に関して言えば、銅鐸についての論文を多く発表しており、銅鐸・銅矛・銅剣文化圏や、銅鐸を使用した氏族の問題など、ユニークな視点から考察し、常に関連諸科学の方法を盛り込んだ学際的な研究の必要性を説いてきた。塩尻市大門字柴宮の銅鐸（ - 3 - 12）は、同市より調査を依頼され、昭和35（1960）年11月4日に小出義治氏とともに自ら調査したものである<sup>(6)</sup>。さらに、昭和34年の考古学協会大会に参加する途上、広島県木の宗山の銅鐸出土地（ - 4 - 1）を、森貞次郎氏・乙益重隆氏・入江英親氏とともに訪れるなど、現地調査も欠かさなかった。

また、「 - 11 方形周溝墓」には、東京都八王子市宇津木向原遺跡例を中心として、千葉県・茨城県など各地の方形周溝墓に関する資料が収集されている。方形周溝墓の名称は、大場博士が宇津木向原遺跡の調査後に命名したことは周知の通りであるが、同遺跡の調査に関する資料には「方形環濠状特殊遺構」と記されていた。発掘調査を経て「方形周溝墓」という名称に至るまでの経緯を窺うことができる。

「 - 13 弥生（登呂遺跡）」は、登呂遺跡の資料に一箱を当てている。パンフレットや絵葉書なども存在するが、大場博士が登呂遺跡発掘調査会の主要メンバーであったことから、発掘風景や、報告書図版・実測図が多く見られ、特に木製品に関する写真・実測図は全体の約半数を占めている。大場磐雄博士資料には、昭和18（1943）年に行なわれた第一次調査、昭和22（1947）年～昭和26（1951）年の第二次調査のほか、復原住居などの資料が認められるものの、その殆どは第二次調査に関連するものである。一方、大場磐雄博士写真資料では第一次調査時の資料が全体の約9割を占めており、遺物出土状況や発掘風景など、現場の作業状況を伝える資料が多数残されている。

このように、大場磐雄博士資料と大場磐雄博士写真資料とは、一体のものとして取り扱うことで、はじめてその真価を発揮するのである。

なお、一覧表中の種別は内容的に重複する部分もあるが、**遺跡・遺構・貝塚・土器・土偶・石器・石製品・石棒・石剣・青銅器**（銅剣・銅鐸・銅戈）・**鏡・鉄製品・木製品・貝製品**（貝を含む）・**装身具・織機・骨角器・獣骨・人骨・植物遺存体・その他**、並びに**埴輪・銭**の23種に分類した。

（山添奈苗）

#### 4．古墳時代編の概要

大場資料のうち、古墳時代に関するものは保管ケースで32箱分に及び、大場資料の中核を占めるものと言えよう。

目次を瞥見すると、遺構や遺物の種別毎に分類された箱（ - 1～12・17～20・23・25～28）と、地域毎に分類された箱（ - 13～16・21・22・24・29・30）とに2大別することができる。中でも、「 - 14・16 千葉県内古墳」や「 - 27・28 玉作」には多くを割いており、単独の地域に対して1箱を当てているものには「 - 22 信濃」がある。また、「 - 15 武蔵・亀塚」と「 - 24 茨城県大生古墳」のように一調査について1箱を占めるものも目につく。

鏡の拓本も多く、旧宮内省諸陵寮所蔵の優品から個人蔵資料に至るまで、膨大な資料が存在する。注記を頼りに略年譜と対照した結果、産泰神社所蔵鏡のように（ - 10 - 9）群馬県赤城神社における昭和18（1943）年の調査に伴って採拓されたものであることが判明した例もある<sup>（6）</sup>。また、発掘調査の際に作製した図面も多い。特に、茨城県常陸鏡塚古墳の調査に関する資料の中には原図が残されており、実測用紙にこびりついた土の色は生々しい。

このように、多数の資料が残されている分野は大場博士の研究フィールドや、本學関係者の手による調査成果と符合しており、資料蒐集の経緯を反映している。玉作関連遺跡・遺物に関する資料は寺村光晴氏の贈呈を受けたものが多く、常総地域の資料を中心に茂木雅博氏・杉山林継氏らの名が散見される。また、長野県の妙義山古墳群（ - 22）・鳥羽山洞穴（ - 22）や、東京都亀塚古墳（ - 15）そして茨城県大生古墳群（ - 24）・常陸鏡塚古墳（ - 13）の発掘調査も、大場博士をはじめとする國學院大學関係者が中心となって実施した事業であった。

一方、博士が直接関わった調査事例以外の遺跡等についても少なからぬ資料が残されており、古い調査事例の内、実態が明らかでなかったものや、各地の社寺所蔵品や個人所蔵の資料など、これまで一般の目に触れることのなかった画期的な内容を含んでいる。

なお、一覧表中の種別は内容的に重複する部分もあるが、**遺跡・遺構・貝塚・古墳・横穴・窯・埋葬施設**（石室・棺など）・**壁画**（装飾古墳・線刻など）・**土器**（土師器・須恵器など）・**土製品・石製品**（石製腕飾類・玉杖・琴柱形石製品・合子など）・**石製模造品・鏡・鉄製品・銅製品**（銅鏡・筒形銅器・巴形銅器など）・**武器**（刀剣・鏃など）・**武具**（甲冑など）・**馬具**（鈴の類を含む）・**木製品・貝製品・装身具**（玉類・耳飾・冠・釧など）・**埴輪・石人石馬・骨角器・人骨・その他**、並びに**石碑・神社・仏像・文書**の22種に細別することとした。

（深澤太郎）

#### 5．歴史時代編の概要

歴史時代編は50箱を超え、大場資料中最多の資料数を誇る。資料の性質上、社寺の宝物など、「 . 祭祀編」と重複する部分が少なくない。特徴としては、仏寺関係の資料も充実している点をあげることができよう。全般的には鏡や瓦関係の資料が多数を占めているが、平成15年度までに整理が完了し

た部分は歴史時代編の前半に相当する - 26までであり、仏像・神像や金石文関係の資料が多く認められる。

大場資料には、氏の調査対象のほか、調査の主たる対象ではないが、それに附随して蒐集した資料や贈呈を受けた資料がある。年月日が記載されたものについては、『楽石雑筆』や略年譜を参照することにより、いかなる経緯で蒐集した資料であるかが、ある程度明らかになる。

試みに歴史時代編の内、これまで整理した資料を瞥見すると、その成果が論文などに直接反映された資料としては、昭和18(1943)年に実施した群馬県赤城神社の調査で得た鰐口(- 6 - 6)が古い。昭和24(1946)年の山梨県日下部遺跡(- 9 - 2)については、略年譜は12月17日から21日まで滞在したとあるが、資料自体には24日の日付が記されている。これは、帰京後に資料の贈呈を受けたものであろうか。このような資料は、公刊された論文・市史・神社誌などが知られており、追跡調査が比較的容易である。

一方、昭和37(1962)年7月に行なった岩手県・福島県の蕨手刀調査では、中尊寺の梵鐘(- 2 - 18)を調査し、昭和40(1965)年に実施した東京都南秋津遺跡の調査に際しては、近辺の神社(- 3 - 9)を調査している。

もっとも、大場資料はそれ自体に価値があることは言うまでもない。しかし、具体的な活用方法を見出すためには、このような作業を通じて資料の性格を見極める作業が求められよう。

一覧表中の種別は内容的に重複する部分もあるが、ここでは遺跡・神社・寺院・廟・学校・家屋・城柵・城館・庭園(チャシを含む)・土器(土師器・須恵器・陶器を含む)・磁器・蔵骨器・瓦・土製品・石製品・石造物・石碑・板碑・青銅製品・鏡・梵鐘・銭・鉄製品・武器・武具・馬具・木製品・貝製品・塔・瓦塔・鉄塔・塔婆・文具・木簡・文書・金石文・制札・棟札・印章・絵画・地図・仏像・神像・肖像・曼陀羅・懸仏(懸仏式の神像を含む)・仏具・鎮壇具・経巻・瓦経・経石・経塚・経筒・獣骨・植物遺存体・神事・その他の571項目に細分した。

(深澤太郎)

## 註

- 1) 國學院大學學術フロンティア実行委員会 2004 『平成15年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』
- 2) <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>
- 3) 國學院大學日本文化研究所 2004 『大場磐雄博士資料目録』
- 4) 大場磐雄先生記念事業会 1975 『楽石 大場磐雄先生 略年譜並著作論文目録』
- 5) 大場磐雄 1975 『楽石雑筆』大場磐雄著作集6 雄山閣
- 6) 大場磐雄・原嘉藤 1961 「長野県塩尻市柴宮発見の銅鐸」『信濃』14 - 3
- 7) 註4文献に同じ